

寮に帰ってきた瑞穂を出迎えたのは、陽気な、というか能天気な歌声だった。

「この歌声は由佳里ちゃんだね。何か良い事でもあったのかな？」

瑞穂は首を傾げた。幼なじみである御門まりやの妹分である由佳里は、だいたい何時でも朗らかな少女ではあるが、今日は特に機嫌が良いらしい。しかも、この歌は……

「♪ハンバーグを作るみたいにな」

通称ハンバーグの歌。由佳里が愛して止まないハンバーグを称えて歌う歌であり、由佳里的には第二の国歌である。

この歌が聞こえるということは、ハンバーグがらみで何か良いことがあったのだろう。瑞穂は微笑ましい気持ちになりながら、歌声が聞こえてくる食堂の方へ向かった。果たして、食堂ではテーブルの上に置かれた何かのチラシを見ながら、由佳里が世にも幸せそうな表情を浮かべていた。キリスト教系の学校に通う身としては、神の恩寵に接した小羊たちが見せたであろう至福の表情、とでも表現すべきか。それにしても、よだれまで垂れてちよつとはしたな

い姿ではあったが。

「ただいま、由佳里ちゃん」

瑞穂が声をかけると、全く気づいていなかったのか、由佳里は弾かれるようにして椅子から飛び上がった。

「あっ、お、お姉さま！おかえりなさい！」

挨拶を返すついでに、こっそりとよだれを拭う由佳里。

お姉さまとしては、ちゃんと叱って上げるべき場面なのかもしれないが、瑞穂は学校の校是でもある慈悲と寛容の精神をもって見なかつたことにした。代わりに尋ねる。

「ずいぶんと楽しそうにしていたけど、何かあったの？」

その質問に、由佳里はよくぞ聞いてくれました、と言わんばかりに勢いよく、テーブルの上のチラシを差し出した。「そうなんですよお姉さま。大変なんです。これを見てください！」

「何かしら？」

チラシを受け取った瑞穂の目に飛び込んできたのは、大きな丸ゴシック体で書かれた

「夏のハンバーグフェア開催！！」

という文字だった。それを取り囲むように何種類ものハンバーグの写真が載っている。数えて見ると、全部で一〇種類だ。

(なるほど、これは由佳里ちゃんには天国ね)

納得しつつ、瑞穂はさらに読み進めた。どうやらこのハンバーグフェアをするのは、「Piaキャロット」というファミリーストランらしい。

(Piaキャロット? どこかで聞いたことがあるなあ)

瑞穂は考え、そして父が以前ユニークな経営方式だと誉めていたファミレスのグループだと思いついた。なるほど、色んなことをしているらしい。一〇種類も特別メニューを考えるのは、容易なことではないはずだ。

ともかく、由佳里が上機嫌な理由はこれでよくわかった。

「それで、さっそく食べに行こうと考えてたのかしら?」

瑞穂が聞くと、由佳里は意外にも首をぶんぶん横に振った。

「とんでもない! そうしたいのはやまやまですけど、お小遣いが」

「え? あら、そうね。結構高いかもしれないわね」
由佳里の答えに、瑞穂は頷いた。ハンバーグ単体

はさほど高いものではないが、セットメニューやドリンクをつけると、軽く千円を超える。おまけに店への交通費を含めると、あつと言う間に経費は二千円を超える。これを一〇種類全部食べるまで繰り返したら、由佳里のお小遣いでは足りないだろう。

いくらお嬢様学校の生徒と言えど、高校生は高校生。それほど高いお小遣いをもらっているわけでもなく、まして由佳里の家はどちらかと言えば庶民の方だ。二万円を超えるお小遣いは望むべくもない。何しろ、家では質素節約を旨とするとは言え、瑞穂だってそんなお小遣いは貰っていないのだ。

「そうすると、本当に食べたいものだけを選んで食べるしか無いかしら」

瑞穂は妥協案を出したが、ことハンバーグに関しては決して妥協しない由佳里が、そんな事を承諾するはずも無い。

「それこそとんでもない! 全部食べるまでわたしは諦めません!」

力強く宣言する由佳里。しかし、無い袖は触れないという言葉もある。

「そんな事言っても、お小遣いは足りないんでしょ?」
瑞穂は諭すように言った。まさか借金をするつもりかし

ら、心の中でつぶやく。それは止めなければならぬだろう。自分がお金が無いから、とかではなく、教育上良くない。

しかし、由佳里もそこまで見境が無い訳ではなかった。ちゃんと解決策を用意していたのである。にんまり笑うと、彼女はチラシの下の部分に指をやった。

「ここを見てください、お姉さま」

「え？ なになに……短期アルバイト募集？」

瑞穂はチラシから顔を上げて、由佳里の顔を見た。

「これに応募するの？」

「はい、そうすればお金も足りませんし、ひよつとしたら賄いでハンバーグ食べ放題かもしれませぬ！」

「そ、それはどうかしら……」

瑞穂は苦笑した。流石に賄いで食べ放題は無いだろう。客に出す物と同じものを食べる機会はあるかもしれないが。

「でも、アルバイトは許可大丈夫かしら……？」

瑞穂はふと気付いて、生徒手帳を取り出した。校

則のところを開いて、アルバイトという文字を探す。

「えつと……ない？ ないわね」

そう、恵泉女学院の校則には、アルバイトについての規定が無いのだった。禁止とか許可と書かれているのではなく、全く無いのである。

「それはそうですよ、お姉さま。うちみたいな学校で、生徒がアルバイトをしたい、なんて考えるはずがありませんから」

「それもそうね……」

由佳里の言葉に瑞穂は納得した。恵泉女学院はお嬢様学校であり、お嬢様が小遣い稼ぎにアルバイトをしよう、とはあまり考えないだろう。それどころか、アルバイトというテーマについて考えられた事すら無いかもしれない。

「そう考えると、アルバイトするのに許可はいらぬ、って事なのかなあ……」

どうもよくわからない。こんな時は、事情通のまりやに相談してみるのが一番だろう。瑞穂はまりやの部屋に向かった。

*

「アルバイト？ うーん、確かにそれは考えても見なかったわねえ」



まりやも知らなかったらしい。首を捻って考えた後、ふと瑞穂を見上げて聞いてきた。

「で、瑞穂ちゃんが何でそんな事気にするの？アルバイトしたいわけ？」

「え？いや、僕じゃなく由佳里ちゃんが……」

言いかけて、瑞穂は慌てて口を閉じたが、もう遅かった。

「へえ、由佳里が？ふーん……なんだか面白そうね」

まりやがニヤつと笑う。それは、瑞穂には獲物を見つけた肉食獣の笑みに見えた。

*

舞台は食堂に戻り、今度はまりやも一緒である。

「やあねえ、由佳里ったら。バイトするならあたしにも相談してくれないと」

まりやは言った。一応由佳里の「姉」たる立場から言えば、当然の事だろう。

「でも、バイトしたいって決めたの、ついさっきでしたから」

まりやの言葉に反論する由佳里。そう言いつつ、

彼女の顔は瑞穂の方を見ている。ちょっと恨めしげな表情なのは、あっさりまりやにバイトの事をばらしたからだろう。瑞穂はこっそり手を合わせて由佳里に謝った。

「でもまあ、バイトするって言うのは悪くないアイデアね。あたしとしては反対はしないわよ」

そう言うと、まりやはなにやら雑誌を取り出してきた。彼女に似合わぬビジネス雑誌……と思いきや、それには件の「P i a キャロット」のオーナー社長のインタビュー記事が載っていたのだった。

「ほらこれ。これは本店の制服らしいけど、なかなか可愛いでしょ？」

まりやが指差す先には、ポニーテールの女性が青を基調とした制服で客に應對していると写っていた。付箋が挟んである所を見ると、まりやはこの制服をチェックして雑誌を買ったのだろう。さすがにデザイナー志望だけの事はある。

「へえ……これなら由佳里ちゃんに似合いそうだね」

瑞穂が言うと、由佳里はそうですか？などと言いながらも、まんざらではない様子で顔を赤くしていた。

「まあ、ここは店ごとに制服が違うらしいから、由佳里が働きに行く店もここと同じかどうかはわからないけどね」



まりやは雑誌を閉じてしまいこんだ。

「ということで、働くならしつかりやってきなさい」

「良いんですか？ありがとうございます、まりやお姉さま！」

あっさり許可が出たことで喜ぶ由佳里。瑞穂もまりやの示した意外な度量に、この幼馴染みの少女を見直す気持ちが出来た。

ほんの一瞬だけだったが。

なぜかという、まりやがその先の続きを言ったからである。

「ただし、一つだけ条件があるわ」

「え」

不安そうな表情になる由佳里。

「条件って……何を言いつける、まりや？」

代わって尋ねた瑞穂に、まりやはびしっと指を突きつけて、とんでもない事を言った。

「監督として、瑞穂ちゃんが一緒に仕事をする。それが条件よっ！」

*

「……は？」

瑞穂がまりやの言葉を理解するまで、たっぷり三十秒はかかった。

「まりや、なんて言った？ 良くわからなかったんだけど」

「や、だから瑞穂ちゃんが一緒に仕事することって」

それでもなお理解を拒むかのように問い返す瑞穂に、まりやは条件の言葉をもう一度繰り返す。

「そうじゃなくて、なんでぼ……私が一緒に行くの？」

「まあ、それはちよつと心配だから、保護者が一緒に行くのが一番かなあと」

瑞穂のもつともな質問に、ズレた答えを返すまりや。

「それなら、まりやと一緒にいけばいいじゃない！？」

「それは考えなくも無かったけど、あたしも色々忙しいからさ」

弁解しながらも、けつして「色々」の具体的な内容は明かそうとしないまりや。これは何か企てるな、と瑞穂は見た。しばし考え、ボソツと口にする。

「で、本音は？」

「そりやもう、瑞穂ちゃんのウエイトレス姿を見た……」

そこで、まりやははつとした表情になり、ついで瑞穂の顔を見た。

「ふ……なかなかやるようになったわね、瑞穂ちゃん」

「そんな何かの老師みたいな事言ってもダメ。私はやらないからね？」

瑞穂の言葉に、ぶーっと頬を膨らませるまりや。

「えー、なんでよ？」

その文句に、瑞穂はさっきの雑誌を貸して、と言って、例のインタビュのページを開いた。

「だって、こんなにスカートの丈が短いのはちよつと……」

由佳里の手前口籠くちかごもる。恵泉女学院では、スカートの丈は長短二種類あるが、瑞穂はいつもロングスカートのタイプを選択していた。何しろ本来瑞穂は男の子である。万が一スカートがめくられて、見られてはいけない場所を見られようものなら、即座に身の破滅である。それを考えると、ミニスカートなど履きたくても履けないし、そもそも履く気は無い。

「いやー、あたしは似合うと思うんだけどなあ」

そんな事を知っているにも関わらず、瑞穂を見ながらいうまりや。頭の中では瑞穂にウェイトレスの制服を着せた所を、色々シミュレートしているのか

もしれない。

「ね、やつてよ瑞穂ちゃん。由佳里のためにも」

「由佳里ちゃんのためじゃなくて、まりや、自分のためでしょ！？」それに、由佳里ちゃんだって子供じゃないんだから、私が監督しなくても……ねえ？」

そう言いながら瑞穂は由佳里のほうを向き、そして思わず硬直した。

なぜかと言うと、由佳里が捨てられた子犬のような表情で、目を潤ませながら瑞穂の顔を見上げていたからだ。

「お姉さま、お姉さまはわたしと一緒にバイトするのは、お嫌ですか？」

(うっ……!?)

今のはかなり破壊力が大きかった。よろめく瑞穂。

「そ、それはその……い、嫌ではないわよ？」

思わず言ってしまう瑞穂。その肩をまりやがぼんと叩く。「ふふふ、言ったわね瑞穂ちゃん？エルダーに二言は無くてよ？」

瑞穂に反論の余地は無かった。

*